

# 浜松市天竜区佐久間町における地域づくりの方策の研究

静岡文化芸術大学 文化政策学部 船戸ゼミ

指導教員：教授 船戸修一

参加学生：金田鈴音、小竹桃佳、鈴木義人

八木彩樺、中野七海

## 1 要約

昨今、人口減少や高齢化によって担い手不足に悩む中山間地域では地域外から地域を支える外部人材に期待が寄せられている。そこで今年度は、佐久間町での調査ならびにプロジェクトを行うことによって地域外から佐久間町を支援したいと考える人たち、あるいは佐久間分校での学びを通じて佐久間町と関わりと考える中学生がどれくらい存在し、どのような意識や考えをもっているのかを明らかにした。

## 2 研究の目的

浜松の中山間地域、とりわけ天竜区佐久間町では人口減少や高齢化によって地域社会の担い手が不足している。よって地域外から地元地域を支援する外部人材を確保することは喫緊の課題である。このような「関係人口」がどれくらい存在するのかを調査やプロジェクトを通じて明らかにする。

## 3 研究の内容

今年度は、①佐久間町のソバ作りへの参与観察を通して、この取り組みの地域外からの参加者についての調査、②入学生徒減少によって存続が危ぶまれる浜松湖北高校佐久間分校の入学者確保のためのプロジェクト支援を行った。

## 4 研究の成果

### (1) 当初の計画

天竜区佐久間町佐久間地区ならびに浦川地区の集落について調査ならびに集落維持の実践活動をする。今年度も浜松市役所の協力のもと9月から教員とゼミ生4人で聞き取り調査を始める予定であった。昨今「65歳以上が半分以上を占める集落」を「限界集落」と呼び、その消滅危険性だけを煽る議論が盛んである。しかし「他出子(集落を出た子どもたち)」が集落の近くに居住し、彼ら彼女たちが頻繁に実家に通えば、そう簡単に集落は消滅することはない。このような集落を越えた家族関係についてのデータは、行政(浜松市)できえ、全く把握していない。また週末など定期的に出身集落の空き家に戻ってくる佐久間町から転出した元住民がいる。このような元住民も住民票には存在しないが集落住民と安否確認、

買い物・農作業支援などで関わっているならば集落を支える「潜在的な住民」である。今年度は、行政（浜松市）も把握していない、佐久間町の集落に定期的に通っている元住民の実態をアンケートによって明らかにする予定であった。また昨年度に引き続き、佐久間町の2集落において「盆道づくり（集落での一斉草刈り）」や祭礼などの集落の共同作業や年間行事についてのチラシを作成ならびに「他出子（あるいはその子ども）」に配布し、地縁・血縁者による集落維持の実践活動も行う予定であった。

## （2） 実際の内容【B】

今年度は、地域住民へのコロナ感染防止のため当初の予定を変更せざるを得なかった。そこでコロナ禍の中でも地域や地域住民との理解が得られた活動、すなわち①佐久間町のソバ作りへの参与観察を通して、この取り組みの地域外からの参加者についての調査、ならびに②入学生徒減少によって存続が危ぶまれる浜松湖北高校佐久間分校の入学者確保のためのプロジェクト支援を行った。

まず①には、地元NPOが実施しているソバ作りに地域外から参加している都市住民がいる。これらの住民は過疎地域を維持するための有力な担い手になる可能性がある。よって、その参加者を調査することは意義がある。

現在、浜松湖北高校佐久間分校は地元（佐久間町や水窪町）の若者をプールする機能を果たしている。現在、在校生は減少し、その存続が危ぶまれているが、廃校になった場合、地域の人口減少に多大な影響を与えることが予想される。よって②のような入学者確保のためのプロジェクトは重要であり、その活動を支援することは意義がある。

## （3） 実績・成果と課題

まず①について。NPO法人ががんばらまいか佐久間（以下、NPOという）の指導のもと、耕作放棄地を活用したそばづくり活動に取り組んできた。そして農作業等の活動を通じた参与観察（2020年9月6日～12月5日）、中山間地域サポーター（浜松市）を中心とするそばづくり活動参加者への質問紙調査（2020年12月5日実施）、NPO理事長への聞き取り調査（2020年12月5日実施）から、中山間地域における今後の新たな担い手について考察を行った。学生は佐久間町において、そばづくり活動に以下の日程で参加した。そばを栽培する畑の草刈り（2020年8月28日）、そばの種まき（同年9月6日）、そばの刈り取り（同年11月3日）、そばの脱穀・選別（同年11月23日）、そしてそば試食会への参加（同年12月5日）である。実施した質問紙調査では、参加者がそばづくり活動を通して、佐久間町や地域における活動についての意識や意志の変化について問うた。調査対象者は、そば試食会出席者のうち同意が得られた参加者とした。

そばづくり活動参加者の意志について、質問紙調査の結果から主に以下の4点が指摘された。第1に、そばづくり活動に参加することによって、約3割の参加者のそばづくり活動を除いて同町へ通う回数が増加している点である。15人中5人が「以前より増えた」10

人が「変わらない」と回答した。第2に、約9割の参加者が、農作業やイベントの手伝いを通して、今後も同町に通い続けたいという意思を示している点である。15人中13人が「通い続けたい」2人が「どちらでもない」と回答した。第3に、そばづくり活動を通して参加者の同町に対する関心に変化があった点である。「天竜区佐久間町におけるそばづくり活動に参加して、天竜区佐久間町に対する見方に変化はありましたか。」(複数回答)という問いに対して15人中8人が「佐久間町にもっと訪れたいと思うようになった」5人が「佐久間町における問題や課題について考えるようになった」「佐久間町に対して貢献したいと思うようになった」「佐久間町が好きになった」などと回答した。第4に、参加者はそばづくり活動以外にも同町において支援をしたいと考えている点である。11人中10人が「佐久間町で開催されるイベントで手伝いたい」7人が「そばづくり活動以外の農作業でも手伝いたい」3人が「集落における祭礼や清掃活動において手伝いたい」(複数回答)と回答した。また参加者の居住地は12人中10人が「天竜区を除く浜松市」他2人が「浜松市を除く静岡県」「愛知県」であり、比較的短時間で同町に通うことができることが分かった。

次に②について。静岡県立浜松湖北高等学校佐久間分校(以下、分校)は、静岡県浜松市天竜区佐久間町に位置し、2020年度現在の在籍生徒数は、1年生14人、2年生14人、3年生22人の計50人である。新入生数が19年度と20年度の2年連続で15人を下回り、静岡県教育委員会が定める『静岡県立高等学校第3次長期計画(平成30年3月)』の「中山間地域等の小規模校の基本方向」における「2年連続して入学者が15人を下回った場合には、...高等学校教育の質の保障等の観点から募集を停止する」という、生徒募集停止の条件に該当している。しかし、寮を再開させるなど、なんとか分校を存続させようと分校や佐久間町の住民たちが努力した結果、2021年度入学の生徒の募集が特例として許可された。分校の存続は、地域の存続にも大きく影響する。そのため、同校が位置する佐久間町で中山間地域の存続をめぐる調査を行う船戸ゼミも、2020年度より分校存続プロジェクトに参加している。プロジェクトの実施内容は、主に以下の2点である。第1に、SNSでのハッシュタグを使用した投稿キャンペーンの実施である。Facebook、Twitter、Instagramにて「佐久間分校を守りたい!」という名称のアカウントを作成し、佐久間分校の卒業生・佐久間町民・佐久間に関わりをもつ人に「#佐久間で会いましょう」というハッシュタグをつけて佐久間・佐久間分校に関する投稿をしてもらうよう呼びかけた。実施期間は2020年8月25日から9月4日である。第2に、中学3年生とその保護者を対象とした一日体験入学における交流会の実施である。2020年9月5日に佐久間分校で行われた一日体験入学の際に、保護者同士、中学生と在校生同士が複数のグループに分かれ約35分間のフリートークを行った。静岡文化芸術大学生は、積極的な話し合いが行われるよう、話し合いの進行を行った。また、交流会の際にSNSキャンペーンの投稿について中学生に紹介し、SNSで検索して見てもらうよう促した。なお、上記の2点は、佐久間分校に加え、佐久間町出身の若者によるコミュニティ「佐久間若者サミット!」と協力して企画・実施した。このプロジェクトの結果、SNSを使用したキャンペーンでは、佐久間分校の在校生や卒業生、佐久間町出身者な

ど幅広い層から投稿があり、総投稿数は約 100 件に上った。また体験入学における交流会では約 20 名の中学生が参加し、滞りなく会を進行することができた。分校が中学生にとつたアンケートでは、「在校生の生の声が聞け、良い学校だなと感じた」「高校生のわかりやすい説明でどんな高校かわかった」「優しそうな人たちが沢山いて安心した」といった感想が得られた。なお、現時点で入学者数は未定である。

#### (4) 今後の改善点や対策

まず①について。参加者へ行った質問紙調査では「交通が不便 道がせまい」「そば（づくり活動）以外の活動を知らない」といった交通アクセスの不便さや活動の広報に関する課題が判明した。大見芳 NPO 理事長は「(参加者への) おもてなしは特に女性部の方々が頑張っているが、年々大変になっている」「(そばづくり活動は) 作業日程が不定期、農作業は重労働だったりする」と活動を行っていくうえでの問題点について考えている。その一方で大見理事長は「そばづくり活動に（都市部住民が）参加することによって人の交流が生まれている」ことを指摘し「イベントや行事を続けることで地域とのつながりを維持していきたい」と話す。「都市部住民は地域に力を与える存在である」とし「佐久間のことを自分のことのように考えてくれるとうれしい」とも話した。質問紙調査の結果からは参加者の意志の変化が見られ、今後の中山間地域における新たな担い手となる可能性が確認された。一方で、地域における活動にはいくつかの障壁があることも明らかになった。今後はこうした課題を考慮しつつ、過疎化・少子高齢化が進行する地域において、新たな担い手について考えていくことが重要である。

次に②について。本プロジェクト内容は、高校に限らず、地域についての情報発信や交流を促進する方法として応用が可能だと考えられる。例えば、佐久間町に関する投稿キャンペーンや佐久間町にゆかりのある人を対象とした交流会を行うことで、写真や会話を通して若い世代が昔の佐久間について知り、普段交流する機会が少ない異世代間同士がつながる契機の創出などが期待できる。

## 5 地域への提言

今回の調査やプロジェクトによって佐久間町外に地域を支援したいあるいは関わりを持ちたいと考える人たちが潜在的にいることが分かった。今後は、このような人たちを主体的に地域住民が活かしつつ、「関係人口」による地域再生につなげていくことが求められる。

## 6 地域からの評価

佐久間地域に入り込んだ調査や活動場所を問わない SNS 活動を通し、地域の「生の声」を聞き取ることができた。今後は、地域の新たな担い手「潜在的な住民」と共に地域再生や今回明らかになった課題解決に期待したい。【浜松市 市民協働・地域政策課 鈴木芙実】